

「親知らず」の未来は知れず

「親知らず」を抜くことになった。ある日、右下の「親知らず」が痛みだし、歯医者にかかったところ、虫歯だとわかり、抜歯を勧められた。「親知らず」は、あごの一番奥に生える第三大臼歯を指すことばで、ほかに「知歯」や「知恵歯」という呼び名もある。本来は上下左右に4本あり、32本あるヒトの歯の中で最も遅くに生える。抜くことになって初めて、この歯に付けられた何とも“切ない”名前の由来が気になって調べてみた。『日本国語大辞典 第二版』(小学館)には、「親不知歯」として立項されており、「20～25歳ごろに生えるので、昔は親と死別していることが多いところから、この名がある」とある。「人生50年」といわれた昔は、自分の子どもの「親知らず」を見ずに亡くなる人が多かったのだろう。

「親知らず」は、個性的な呼称のせいか、歯科関連のホームページや書籍などにも、興味深い記載が多い。例えば、その「呼び名」は、国によって違うという。英語では、“物事の分別が付く年頃になってから生えてくる”ことから「wisdom tooth」と呼ばれる。ドイツ語の「weisheitszahn」、フランス語の「dent de sagesse」、中国語の「智歯」も同様である。日本語の「知歯」「知恵歯」という別名はここから来たのかもしれない。韓国では、“恋を知る年齢になると生えてくる”ことから「愛の歯」ともいわれ

るそうだ。「親知らず」の捉え方でもお国柄が出ていておもしろい。

日本では「親知らず」ということばは、いつごろから使われていたのだろうか。前出の『日本国語大辞典』によれば、長崎でイエズス会の宣教師と日本人修道士によって刊行された『羅葡日辞書』(1595)に立項されていたと書かれている。少なくとも安土桃山時代には使われていたようだ。日本人と「親知らず」ということばとの付き合いは長い。

しかし、この「親知らず」は、現代人、特に私たち日本人には、生えない人も多いという。人類学者の鈴木尚氏によれば、縄文時代に8割の人に生えそろうていた「親知らず」は、鎌倉時代には5割に減り、現代では4割にも満たないそうだ。生活習慣や食生活の変化の影響だともいわれるが、はっきりしたことはわかっていない。数世代先には、「親知らず」がヒトの歯として存在しなくなり、「親知らず」ということばもまた忘れ去られるときが来るのだろうか。

小学生の娘は、まだ乳歯が大人の歯に完全には生えかわっていない。「親知らず」が生えるころには、どんな大人になっているだろうか。そして将来「親知らず」を知らない世代が生まれるとしたら、それはどんな時代だろうか。知らず知らず、そんなことを案じながら、“抜歯”の日をこわごわ待っている。

滝島雅子(たきしま まさこ)